

W. I. タマスの社会心理学

—その領域規定と方法論—

大 橋 英 寿

19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会心理学の萌芽・発展期に、J. デューイや G. H. ミードなどと共にシカゴ学派の一人として活躍したタマス (W. I. Thomas 1863~1947) については、「態度」概念の提出者としてのほかは、とりわけわが国では社会心理学の側からの検討がなされないままできている¹⁾。しかし、これはタマスにだけ限られたことではない。一般にわが国の社会心理学は学史の十分な検討と議論を経ないままにきたと云って過言ではない。その理由は、周知の如く社会心理学のわが国への本格的な導入・定着は戦後であり、その吸収に追われ、しかもその際、個々の課題や理論をすでに分化したものとして受容し、学史の上でのその発生と位置の必然性へ向けての反省の余裕をもたずにきたことにあると云えよう。しかし、とりわけタマスについて十分な検討がなされてこなかったのは、このような一般的な状況に加えて、タマス自身、理論を体系化した著書を残さなかったことにある。体系化よりもむしろ、未開文化、移民、非行、犯罪などの具体的な人間生活のトピックの追求に彼はたえず関心を示しつつけた。しかし、その生涯にわたる実証研究をひとつひとつたどっていくと、そこに明確な課題意識にもとづく概念設定とそれに支えられた一般理論が存在することに気づく。一連の論文と実証研究に散在する社会心理学についてのタマスの考えを、とくに社会心理学の領域規定とそれへの方法論、概念、理論を中心に整理すること、そしてその学史における位置をみることに、小論の直接の目的がある。しかしそれは単なる学史的回顧のためではない。われわれが具体的な課題に接近する際に常に出会う社会心理学における基本的な問題を提出し、それに対する解決のひとつのモデルを示しており、その点で今日なお積極的意義をもちつつけていると考えるからである。

晩年、研究上の関心と業績について問われた際、タマスは二点に要約して答えてい

る。「第一は、文化史の社会心理学的領域、いいかえればいろいろな文化的環境と歴史的時期において、人種、民族性、階級、利益集団との関連でためされた社会心理学である。第二には、自伝、事例研究、継続的かつ組織的な面接調査等のかたちにあられる生活史を通しての文化的環境と特殊な経験との関連での、正常者・犯罪者・精神病者における人格の発達である」と。²⁾

タマスの関心と業績は大きく三つの時期にわけてみることができる。

初期は、1890年代から1910年前後までの20年間。この時期の彼の関心は二つの方向に向けられている。ひとつはドイツ民族心理学への関心とそれをふまえた社会心理学の領域設定である。

The Scope and Method of Folk-Psychology (1896)³⁾

The Province of Social Psychology (1904)⁴⁾

いまひとつは、この枠組の実際問題への適用の試みである。

Sex and Society (1907)

Source Book for Social Origins (1909)

前者は、生物学的本能説にもとづく性の解釈の論文9編を集録したもの、後者は未開社会の文化資料をもとに社会変動を統制、注意、動機の内容をつかかって説明したものである。

中期は、1910年から25年前後までで、ポーランドの移民を素材にした一連の実証研究に従事した時期。代表的なものとしては、

The Prussian-Polish Situation (1913)⁵⁾

The Persistence of Primary-Group Norm in Present-day Society and their Influence in Our Education (1917)⁶⁾

Polish Peasant in Europe and America (1918~20)

The Unadjusted Girl (1923)

なかでも、F. ズナニッキとの共同労作 **The Polish Peasant in Europe and America** は、その集大成で、これをもってアメリカの社会科学が思弁的段階から実証的段階へ進んだ画期的な業績と評価されている。この研究は、外国の分割統治下におかれたポーランドで、従来の生活組織の維持が困難となった農民がアメリカへ移住したとき、アメリカという異なった環境のもとでそれまでのポーランド農民の価値や態度がどのように崩壊・変容していったかを手紙、日記、自伝、裁判記録などを素材にして分析したものである。

2000頁を越えるこの大著は4編からなる。第一編「第一次集団の組織」は、方法論について、従来のポーランドの農民生活が描写され、それを示す資料として家族間に交換された手紙(28家族・480通)が、ついで家族的結束の解体を示す手紙(22家族・275通)が集録されている。第二編「ポーランドにおける解体と再組織化」は農民家族と地域社会の解体の様相、従来の社会組織を維持しようとする抵抗、その際のリーダーシップや教育の役割を、180余の新聞・雑誌記事などによって示す。第三編「アメリカにおける組織化と解体」は二つの側面から問題を扱う。まずポーランドからの移民のさまざまな適応のタイプ、および彼等による新たなポーランド系アメリカ人社会の形成過程と故郷との関係を手紙と統計資料によって分析する。もう一つは、この移住者のアメリカにおける非適応の側面で、経済的破綻、家族離散、殺人、放浪生活者、少年非行の諸問題をシカゴの救貧施設、地方裁判所、警察、少年院などの記録によって分析する。第四編「移民の生活記録」は、Wladek とよばれる個人の詳細な自伝的生活記録を素材にして、気質と性格の関係、社会的要求への人格の適応、個人の生活組織と社会組織の関係が論じられる。

後期は1925年以後で、晩年のタマスはそれまでの実証研究をふまえて、人格理論、方法論、調査法、文化の比較研究法など社会科学一般に関する論文を残した。その代表的なものとして、

The Configuration of Personality (1927)⁷⁾

The Behavior Pattern and Situation (1927)⁸⁾

The Relation of Research to the Social Process (1930)⁹⁾

The Comparative Study of Cultures (1937)¹⁰⁾

などがある。なお、晩年着手したユダヤ人、スウェーデン人などの移民の研究は未完に終わっている。

1. 社会心理学の領域規定

タマスがその生涯で研究に従事した1890年代から1940年という時期は、社会心理学という新しい学的領域がアメリカにおいて「社会心理学」という名のもとにはじめて成立し急速に発展した時期と重なる。周知の如く、社会心理学は社会諸科学の中でもっとも遅れて成立した、成立せざるをえなかった領域である。既成の心理学、社会学、文化人類学がその人間性の認識において自己の領域における不足部分を充たそうとしたところに、すなわち心理学が「社会・文化と結びついた個人の認識」を、社会学・文化人類学が「個人と結びついた社会・文化の認識」を求めたところにその成立の必然性をもった領域である。そのさい、この新しい領域の規定と接近に当たっての中心概念や単位をめぐって、さまざまな立場からの主張と議論が展開されてきたし、現在もなおつづいている。以上のことを念願において、以下タマスの立場をみていきたい。

タマスの社会心理学は、ドイツ民族心理学への検討と H. スペンサーの進化論にもとづく有機体説社会学への批判から出発する。これを最初に論じたのが初期の論文 **Province of Social Psychology** (1904) で、その主張は以下の如くである。

「ラッアールスとシュタイントールにおける〈社会心〉(social mind) の概念およびスペンサーの〈有機体〉としての社会の概念は、比喩的な意味以外に〈社会心〉あるいは〈社会的有機体〉が存在するかどうかという問題を提起してきた。現在これについて一致している意見は、〈社会的有機体〉は有効的なアナロジー以上のものではないということ、そして〈個人心〉(individual mind) や個人心理学から離れてはどのような〈社会心〉も社会心理学も存在しないということである。しかし同時に、過去20年間の心理学と社会学の発展は、社会的な環境を離れては〈個人心〉は理解できないということ、また〈個人心〉の作用を離れては社会は理解できないということを明らかにした。ここから社会心理学が出てきたし出てきつつある。……社会心理学は、社会によって条件づけられる限りでの個人の精神過程および意識の状態によって条件づけられる限りでの社会過程を研究する。この点から、社会心理学は一定時点においては、個人あるいは社会のいずれかを対象とする。民族学、歴史および集団生活一般はそれが心理学的観点から、すなわち注意、関心、習慣、認知、情緒、意志などの観点からみられるとき社会心理学の主題となり、また他者あるいは社会一般に見出される意識条件の一定個人の意識への影響について検討するとき個人は社会心理学の主題となる。いいかえると、社会心理学の領域は、個人意識と社会との相互作用の検討、ならびにその相互作用の一方では個人意識への影響、他方では社会への影響の検討にある。……以上の社会心理学の領域についての観点は少なくとも他の科学によっては充たされない作業の場を示す価値をもつ。用いられる素材が全く新しいのではなく、ここに提出された諸問題が他の科学と関連をもたないのでもない。しかし結局、ただひとつのリアリティが存在するだけである。そして、新しい科学は新しい注意の方向以上のものを示すのではないのだ。……心理学、社会学、人類学、民族学、民俗学および歴史学からの社会心理学の独立は、これらの諸科学を補なう、かつ生活と社会の研究にとって大切な結果を生み出すであろう……」¹¹⁾

ここでわれわれは、このタマスの社会心理学の領域特質の規定(1904年)が E. N. ロスと W. マクデュガルによる最初の社会心理学のテキストの提出(1908年)以前であったこと、ならびにその源をドイツ民族心理学に求められていることに注目しなければならぬ¹²⁾。社会心理学の領域については、これより10数年後、『ポーランド農民』¹³⁾における実証研究に先立つ「方法論についての覚書き」の中で再び論じられている。

そこでは個人心理学ならびに社会学との対決のかたちで以下の如く展開する。

タマスによれば、社会に関する具体的な問題で常に関心の中心をなす二つの基本的な問題がある。それは、1) 個人の、社会組織と文化への依存の問題、および、2) 社会組織と文化の、個人への依存の問題である。従って、理論が真に問題を解決するためにはそこに二種類のデータを含んでいなければならない。すなわち、1) 「社会生活の客観的な文化的要素」(**the objective cultural elements of social life**) と、2) 「その社会集団の成員の主観的特性」(**the subjective characteristics of the members of the social group**) であり、両者は常に相互関連しているものとして把握されなければならない、とする。タマスは、1) の客観的な文化的要素を示すものとして **social value** あるいは単に **value** という概念を、2) の主観的特性を示す概念として **attitude** という概念をあてた。ここで **value** は「一定の社会集団の成員に接近しうる経験内容および行為の対象となる、あるいはなりうる意味をもつすべての事項」と定義される。他方、**attitude** は「社会における一定個人の意識過程」と定義される。そして、**attitude** は **social value** の対応物であり、行為はそれがどのようなかたちのものであれ、**attitude** と **value** をつなぐものである。すなわちタマスは、行為を **attitude** と **value** の相互関連として分析把握しようとする。**value** が行為との関連、および個人意識との関連によって自然物と区別されるように、**attitude** は行為との関連およびそれによる社会との関連によって心的状態と区別される。ここで個人心理学が扱う心的過程はそれ自身がひとつの対象として扱われる **attitude** となる。**attitude** は **value** と関連づけてとらえられる心理的過程なのである。すなわち、「心理的過程は基本的には常に〈ある人の状態〉 (**a state of somebody**) なのに対して **attitude** は常に〈あるものへの態度〉 (**an attitude toward something**) である」。

このように規定された **attitude** はタマスの社会心理学の中核概念となり、これによって社会心理学の領域の特質を他の社会科学とりわけ個人心理学および社会学との対決において展開する。まず、個人心理学と社会心理学の領域および方法論上の差異についてタマスはつぎのように論じる。

個人心理学はその立場を問わず **attitude** を扱ってはこなかった。すなわち、個人を孤立した全体としてとらえ社会的環境から個人を分離する探究方法は、それが内省分析による人の意識過程の内容と形式を決定しようとする立場であれ、あるいは意識過程にともなう有機的事実を研究しようとする立場であれ、あるいは行動を実験的に一定の刺激への反応として研究しようとする立場であれ、結局これらの立場は、心的・生理的な、より一般には生物学的な事実としての個人と結びついた心的・生理的あ

るいは生物学的な事実を見出しているにすぎない。このような方法は、それが科学的な普遍性に到達しようとするためには、心的・生理的・生物学的事実にあらわされているかぎりでの人間性の普遍的な永続性と同一性を前提として進まざるをえなくなる。すなわち、その基本的な概念はすべての人間に適用できるようなものでなければならず、その場合、個人差ということは同一の基本的な背景の偏差だとする考えによって、つまり、さまざまに変化する強度や量または基本的には同じ普遍的な過程の結合の仕方によって説明されることになってしまう。意識現象をこのように扱う個人心理学では、ある特定の複数個人にのみ限られるような現象は複合的なものとして扱われ、その場合、根本的・普遍的な要素に還元されるか、それが不可能な場合には、社会的環境の偏差によって変化するその内容が脱落させられて、その発生の形式だけが、それは何処で何時起ろうとも多分同じものだとして構成される。これに対して、社会心理学が扱う意識現象は、「一般的ではなくて、特定の社会的条件のもとでの人間性にその源をもつ意識現象」であり、「社会的条件の偏差と共に変化するが、同一の条件のもとではすべての個人に共通する意識現象」である。そして、意識的生活の表出は単純・複雑を問わず、一般・特殊を問わず、すべてが **attitude** として扱われる。どのような **attitude** も行動への傾向をもつからである。このような行動の対象はすべて **value** として扱われる。なぜならそれはすべて対象者へ接近できる「内容」とその活動の対象となりうる「意味」をもつからである。かくして、タマスはここで社会心理学を端的に「**attitude** の科学」と規定する。そして社会心理学の方法論は個人心理学のそれと基本的に異なるけれども、その領域は意識生活と同じ広さをもつとする。

ひるがえってタマスは、社会学との対決において社会心理学の領域特質を論じる。

タマスによれば、一定の社会集団における **attitude** には二種類ある。すなわち、1) 統一・多様、孤立・結合を問わず、個人的な行動においてのみあらわれる **attitude** と、2) 多少とも明確なフォーマルな行動規準に間接的なあらわれ方を示し、それによって集団が成員に一定の行動型を維持・規制し、より一般化しようとするような **attitude** である。この 2) のような行動規準——たとえば慣習、儀式、法的・教育的規範、信念や目的——は内容をもち、従って **value** として扱われる。その点で一個人の行動もまた **value** として扱われる。規準と行動とは、それにあらわされている **attitude** によってではなく、それによってひきおこされる **attitude** によって、他のさまざまな **value** と類似している。タマスはこのような **attitude** は社会心理学の主題とはなりえず、それは社会学の対象である一群の客観的な文化を構成するものだと

する。すなわち、行動規準とそれへの行動は、その客観的意味において、社会制度を構成し、制度の全体はその集団の社会組織を構成する。この社会組織の研究においては、**attitude** は **value** に従属する。すなわち、行動規準と社会制度に影響を与え変容させるものとしてだけ、**attitude** が問題になるにすぎない。

かくしてタマスは、社会学を「文化の一特殊科学」(a special science of culture) と規定し、それに対し社会心理学を「文化の主観的側面の一般科学」(the general science of the subjective side of culture) と規定する。そして社会学も社会心理学もともに個人と具体的な社会集団との関係を扱う点では共通であるが、しかしその観点は逆である。すなわち社会心理学が「一定の社会集団のすべての文化的な **value** に対する個人の **attitude** を課題とする」のに対し、社会学は「一つのタイプの社会的 **value** のみを個人の **attitude** との関連において扱う」のだとする。

2. 方 法 論

上にみたごとく、タマスは社会心理学を「文化の主観的側面の一般科学」、あるいは端的に「**attitude** の科学」と規定する。このように規定された領域の課題に接近するに当たっての中核概念として、既述の **value** および **attitude** に加えて **situation** の概念を提出した。この三つの概念が三昧一体となり機能的に結合して理論を構築している。

ところで、**value**, **attitude** および **situation** が中核概念として成熟したのは『ポーランド農民』においてである。初期においては、**control**, **habit** および **crisis** という概念が上のそれぞれの概念に相当するものとして用いられていた¹⁴⁾。その際、**crisis** という概念にタマスは独自の重要な意味を含ませていた。国家とか地域社会、あるいは個人が、ある急激な変化に出会い、それまでに集団や個人がみにつけていた **habit** ではその変化に適応できず、何んらかの新らたな対応をせまられるようなそういう新しい条件や緊急事態を彼は **crisis** とよんだ。この例として、集団が出合う飢餓、悪疫、敗戦、旱魃、洪水などの突発事象、また個人が通過する誕生、思春期、死など、さらに窃盗や暴力などの個人間の利害の衝突がある。このような事象が、**control** や **habit** の観点からみると、それは社会心理学のもっとも中心的な課題となると、タマスは考えたのである。¹⁵⁾

ところが、その後タマスは、この **crisis** 概念を単に個人や集団が出会う危機的な状況だけに限定せず、出会う状況一般を意味するものへと概念の枠を拡大し、これを

situation とよんだのである。ここで **situation** とは「個人あるいは集団が行為の過程で扱わなければならない、且つそれによってその行為が計画され結果が評価される **value** と **attitude** のセット」であり、その点からみると「具体的な行為はすべて **situation** の解決である」。**situation** はつぎの三種類のデータを含む。i) 個人あるいは集団が行為しなければならない客観的な条件、すなわち一定の時点で個人あるいは集団の意識的な地位に直接・間接に影響を与える **value** の全体。ii) 一定の時点で個人の行動に現実の影響をもつ、個人あるいは集団に前もって存在している **attitude**。iii) **situation** の規定 (**definition**)、すなわち置かれた条件についての多少とも明白な観念と **attitude** についての意識。¹⁶⁾

さて、**attitude**, **value**, **situation** は三位一体になって機能的に関連しあいながら、課題解決の過程を構成するのだが、具体的な研究に当ってはそのトピックの課題の目標の側面にそってこの三者のうちのいずれかが中心になる。このうちタマスはとくに **situation** に中心をおいた行動研究を **situational approach** とよんで重視する。タマスは、人間行動の説明には、人の「固有の性質」から説明する観点と「**situation**」から説明する観点とがあるとする。そして、「固有の性質」から説明しつづけようとすると、体質、内分泌作用あるいはある種の本能の優勢などの差異を仮定することになり、その結果無限の推論へ入り込んでしまうとして批判した。それに対し **situational approach** は、本能や固有の性質を無視あるいは軽視し、非常に多様な **situation** における行動や習慣形成を比較研究する方向をとる。彼はこの立場に立つ。タマスは、社会科学の方法としての **situational approach** の利点として三つの点を指摘する。1) この方法は科学一般の目的である「一定条件のもとで、一定の比率をもって、一定の結果が生じる」という命題にかなうこと。2) 行動に含まれている変数の分離を可能にすること、すなわち異なった **situation** における行動を比較研究することによってさまざまな決定因とその相互関係を明らかにすることができる。3) 社会調査における統制群の必要性を強調する。¹⁷⁾

ところでタマスは **situational approach** だけでは社会科学の要求をすべて満たすとは考えなかった。というのは **situational approach** は観察者が記録し分類しうる客観的な側面のみを扱っているにすぎないのであり、それだけではその **situation** に置かれた個人にとってどのように見えるかという主観的な体験が把握されないからである。この主観的な体験を知るための素材として、手紙、日記、自伝およびケースワーカー、社会学者、精神病医などによってとられた生活体験の記録を重視し、とくにこれを「個人的記録文書」(**personal document**) とよぶ。これによってさまざま

な社会的な **situation** の一定個人にとっての意味を、すなわち **situation** についてのその個人の規定の仕方を、そしてその個人の適応の仕方の一般的な特質を明らかにしようとした。しかし、このような個人的記録文書のもつ欠点、すなわち個人の内省や記憶についての確実な観察・検証の不可能性、および偏見、選択、補充とその真偽確認方法の欠如からくる信頼性・妥当性の弱さについては、タマス自身認めている。にもかかわらず、タマスはたとえ非常に主観的な記録でさえも、またそれ故に行動の分析や説明に価値もつと考¹⁸⁾えた。

またタマスは、とくに個人記録文書を用いた生活史研究を、仮説構成の点から重視する。生活史の比較検討によって行動の多様な側面の資料、たとえば、**i)** 社会の一般的な文化型と関連する複数個人の理念と目的の体系や多様な特殊文化刺激の相対的な影響度、**ii)** 社会における役割についての個人の観念の発達過程、**iii)** 社会的組織や制度と個人の適応の関係、**iv)** 各発達時期における **crisis** の内容、**v)** 言語行動と実際の行動とのズレ……などが得られると考¹⁹⁾えた。つまり詳細な生活史の事例研究によって概念、範疇、単位、変数を発見し、それにもとづいて仮説を構築する帰納的な方法をとろうとしたのである。

3. 人格理論および社会解体理論

実証研究をとうしてタマスはいくつかの注目すべき理論、たとえば、社会的な人格理論とそれにもとづく人格類型論、独自の「4つの願望」の理論、社会的統制の理論、社会組織の解体の理論、文化変動の理論などを展開している。ここではそのうち、人格理論と社会組織解体理論を中心に整理検討したい。

1) 人 格 理 論²⁰⁾

社会心理学における人格理論を構築するに当りタマスはまず、＜社会的な人格＞ (**social personality**) としての個人の行動は観察者の直接体験によっては説明されないとして従来の内省による個人心理学の立場を否定する。同時に、台頭しつつあった当時の行動主義の立場に対しても、社会的な人格としての個人の行動は感覚的に観察される身体的運動へ還元できないとして批判した。それに代って二つの点を、すなわち「主体にとっての意味の世界」の重要性と人格を静的なものとしてではなくに不断に発達する組織体として把握することの必要性を強調する。

タマスは人格を構成する変数として＜気質＞ **temperament**、＜性格＞ **character**、＜生活組織体＞ **life organization** のほかに「4つの願望」を加える。ここで、＜気

質>は「あらゆる社会的影響から独立して存在する個人に固有な **attitude** 群」を意味し、本能的な性質をもつ。また<性格>は「この気質に作用した社会的影響によって発達した組織された **attitude** 群」を意味し、意識的な性質をもつ。そしてこの<性格>を組織づけている常態を<生活組織体>とよぶ。<生活組織体>は「個人の体験内で選択され組織化された **value** 群」の存在を示すものであり、この **value** 群は生活過程で組織化された **attitude** の原因であると同時に結果でもある。タマスが<人格> (**personality**) と云うとき、この<生活組織体>を指している。要するにタマスは、**value** と **attitude** の統合体として人格をみるのである。その際、行動は観察者にとっては生活組織体の表現されたものとして客観化されるが、これを理解するには主体としての個人の主観的な世界が把握されなければならない。「対象が個人に対してもつ意味が重要なのは、個人の行動を決定しているのはこの意味だからである」、「ひとが影響をうけながら適応しようとしている環境が彼の世界である」とタマスが云うとき、それは後に K. レヴィンが生活空間とよんだものを意味していたと考えられる。

人は多種多様な欲求をもつが、そこには社会における相互作用によってしか充足されない欲求がある。これの基本的なものとしてタマスは「4つの願望 (**wish**)」を指摘する。これは J. ワトソンの新生児の情緒的反応の研究に示唆されている。その定義・種類は時期によって多少異なるが、「**The Unadjusted Girl**」(1923)では、1) 新しい経験を求める願望、2) 安全を求める願望、3) 感情的反応を求める願望、4) 社会的承認を求める願望、をあげている。²¹⁾<願望> (**wish**) は「行為へかりたてる力」と定義され、それは行動の「原因」をなすものではなく、説明のための構成概念であったが、当時の本能論の影響、とりわけ S. フロイトの影響をここにみることができよう。しかし晩年には「4つの願望があるのではなくて、願望が生じる4つの場 (**field**)・領域 (**region**) があるにすぎない」として願望概念をすてた。

以上のような構成概念のもとにタマスは人格の形成と類型を展開する。方法としては、具体的な個人の生活記録を素材とする事例研究の有用性を最大限に強調するが、その場合理論にもとづいて事例が選択され、社会的人格を構成している **attitude** と **value** の内容に関連させて類型化がなされなければならない。一定の **attitude** からどのような一定の **attitude** へと発展する可能性をもつか、あるいは一定の **value** からどのような一定の **value** へと発展する可能性をもつかが重要になる。これをタマスは<典型的な発生方向> (**typical lines of genesis**) とよぶ。この発生方向は理論的には無限の多様性をもつが、現実には次のような理由からその可能性が限定されてく

る。1) 多少とも固定した **attitude** を習得した後は、ある種の影響はその固定化した蓄積と協和しないために力をもたない。つまり、**attitude** の固定化は彼の将来の発達がとる方向の可能性を減少させることになる。2) 一定の個人が生きる環境は限られた **value** しか含んでいないことからくる外側からの消極的な限定、3) 社会が個人を一定の行動の枠へはめこんでしまうことからくる積極的な限定、すなわち幼少年期の家庭教育、一定の通路をもつ職業の課程、結婚などの連続的な影響は日常生活の周期の規則性をつくりだし、また経済的、法的、道徳的な **sanction** が一定の行動を排除する。この枠が一貫性をもって安定していればいるほどその集団の個人間の相対的類似性は高まることになる。

人は欲求充足のために社会的現実を統制しつづけなければならないが、その際必要なのは一定した画一の反応ではなくて、多様な **situation** に関しての「一般的な図式 (**schema**)」である。成長につれて<性格>の中にとり入れられた **attitude** は固定化がすすみ、<生活組織体>における対社会の図式は安定したかたちをとるようになる。しかしなお開かれた発達の可能性を残す。この可能性は、<性格>に含まれた **attitude** の性質と<生活組織体>のもつ図式の性質、およびこの両者の統一化・体系化のあり方に依存する。この観点からタマスは社会的人格を<**philistine**>、<**bohemian**>、<**creative man**>²²⁾の三つに類型化する。

<**philistine**>の特徴は、その強く固定化した **attitude** にある。社会的環境のうちの変化しない領域へしか適応しない。残された発達の可能性は、年令と環境の時勢によるゆっくりした変化である。また、欲求と関心が限定されているために、常に同じように **situation** が規定されている社会的伝統を受容しやすい。その意味で常に同調者である。生活条件の不測の変化に出合った場合、行為の混乱をひきおこし、その新しい **situation** が不明確にしかみえず、暗示をうけやすい。

<**bohemian**>はこれと対照をなす型である。その発達の可能性は閉じられてはいないが、しかしこれは気質的な **attitude** が初期のまま、相互に関連しない状態にとどまって安定した組織を構成していないことによる。それ故にどのような影響に対しても開かれた状態になっている。生活における不決定な多様な図式をもち、図式の選択はそのときどきの見方に依存する。新しい **situation** に出会うときある程度の順応性を示すが、それは一時的なもので体系だった生活組織体をつくりだすものではない。一貫性の欠如がこの型の特徴である。

<**creative man**>は、定まっていって組織だてられてはいるが、発達の可能性と必然性をもつ。その性格を構成している反省的な **attitude** は、生産的な活動のプランに規制されながら、他方変化への傾向をも発達方向の影響に対して開かれているからである。自己の環境の統制を拡大しようとして新しい **situation** を探し求め、たえず増加する社会的現実の領域へ自らの目的を順応させる。

以上の三つの類型を、タマスは社会的人格の発達の理想的な極限点の基本的な型、すなわち理念型であって、具体的な個人はこれがさまざまな比重で混合したものであ

るとする。しかし発達の過程が進むにつれて、このうちのいずれかの方向が強まり、人はますますその類型に近づきそれ以外への発達の可能性が減少するものとみなしている。われわれはこのタマスの三つの類型の継承・発展を後日 **D. リースマン**の展開した三つの性格類型、伝統志向型、他人志向型、内的志向の中に見出す。²⁴⁾

2) 社会解体理論

『ポーランド農民』の研究においてタマスは、ポーランドの農村社会で比較的短期間に生じた急速なしかも根本的な変化を記述する必要にせまられ、これを素材にして集団の<組織化> (**organization**) と<解体> (**disorganization**) をめぐるいくつかの概念と一般理論を提出した。

初期の論文においても集団の連帯性や組織化の問題を扱い **situational approach** によってこれらは「**situation** についての規定の共通性の程度に依存する」とした。さらに、**C.H. ケーリー**の提出した第一次集団の概念をも<**situation** の規定>に関連させて説明する。タマスによれば、第一次集団とは「親族、孤立、そして (**situation** の) 規定に関しての一定の体系への自発的同意をとうして成員間で情緒的な合意をもっている社会」である。第一次集団における共通の <**situation** の規定> は、過程であると同時に結果である。過程としての<**situation** の規程>は社会化 (**socialization**) に示される。すなわち、発達の各時期において人は自己に対して規定された **situation** をもつことによってどう行動すべきかを学習するのである。一方、結果としての<**situation** の規定>は社会的慣例すなわち行動規範にあらわれる。従って一定集団におけるこの<**situation** の規定>の過程と結果の両方の一致が第一次集団にみられる安定性と連帯性を示すのだとみる。

タマスは<社会的解体> (**social disorganization**) を「現存する行動に関しての社会的規則の一定集団の個々の成員に与える影響の減退」と定義し、当時の国際社会をこれをもって特徴づけた。タマスによれば<社会的解体>は限られた社会や時代にのみみられる現象ではない。どの社会にも常に規則や制度を破る個人的な事例が存在する。ただ安定した時代にはこのような個別的な<解体>は集団によって **sanction** され、規則が強化される。従って制度の安定性とは云っても、それは<解体>の過程と<再組織化> (**reorganization**) の過程のダイナミックな均衡にすぎない。<解体>が長期間にわたると集団は分解するわけであるが、通常はその限界に到る前に<組織化>の単なる強化ではなくて、集団の変動した要求にヨリ順応するような新らたな行動図式と制度の創造による<再組織化>の過程によって対応され阻止される。この新らたな図式と制度の創造を<社会的再体制化> (**social reconstruction**)

とよぶ。その際、この〈再体制化〉は、少なくともその集団のある部分の成員が個人的に解体されずにいることによって、またその限りにおいて可能となる。

さて〈社会的解体〉は、それがどのようなものであれ、すべて伝統的な社会的行動図式に対する積極的な抵抗である。この点からみれば、流行の拒否、窃盗・殺人などの犯罪行動、階級組織や政治秩序の破壊、宗教的異端などは等しくその社会体制のもとでは、その十分な表現が不可能な傾向のあらわれであるという点で、およびその状態が継続すればその体制の破壊をもたらすという点で、基本的には同じである。このような一般的な類似性にもかかわらず、そこに重要な差異があるとして、タマスはこれを〈反抗〉(revolt)と〈改革〉(revolution)という概念で区別した。第一に、〈反抗〉の特質はその利己主義的性質にある。たとえ集団の多くの成員がそれに参与していたとしても、伝統的な体制のもとではもつことのできない value に対する個人的な要求である。それに対し、〈改革〉もまた個人的な要求を含んでおり、その限りでは反抗と同じであるが、〈改革〉の基本的な特質は、地域社会、階級、国家などの集団の全体にとっての新らたな value への要求をもっていることにある。第二に、〈反抗〉は、意図的・意識的に旧い体制の破壊を目的としたものではない。その目的は特定の場合における特定の欲求の充足にある。規則の破壊はこの充足に付随して生じているにすぎない。それに対し、〈改革〉の直接の目的は、伝統的な体制の、少なくともその部分をなす行動図式の廃止であり、一定集団内におけるその影響を永久に破壊することであり、またそれは旧い体制がつづくかぎり自由に充足することの不可能な欲求の永久的な充足への道を開くことである。

〈社会的解体〉に関して、タマスはいまひとつ重要な問題を提起している。それは〈社会的解体〉と〈個人的解体〉(individual disorganization) すなわち「自己の基本的な関心が効果的・前進的・継続的な実現に向かうべく生活全体を組織化する個人の能力の減退」との関係如何という問題である。これに関してタマスは、集団組織と個人の生活組織とが依存関係はあるにしても一致しないのと同様に、この両者にも直接の対応関係はないと結論づけた。多くの論者が、離婚や非行、犯罪などの説明を〈社会的解体〉に求めているが、タマスは、そのような問題行動が相対的に規範の欠如する社会に発生する状況にすぎないと〈社会的解体〉をみたのである。²⁶⁾

以上、タマスによる社会心理学の領域・課題の規定およびそれを構築している諸概念と諸理論の骨格を概観した。自己の思想を体系化した著書をタマスは遂に残さずに

終ったが、いま生涯にわたる精力的な研究の跡をたどってきたとき、そこに独自の社会心理学の枠組とそれによる人間認識の視点の存在に気づく。 **attitude approach** あるいは **situational approach** とよばれるこのタマスの社会心理学の立場の学史的立場について若干検討を加えたい。

さて学史をふりかえるとき、社会心理学という新しい領域をめぐる接近は二つの方向からなされた。一つは、その焦点を社会におく接近であり、群衆・集団・カースト、階級などの集団行動から出発する。そのさい個人は集団の中に埋没されるが、それにもかかわらず暗示や模倣などの心理学的概念がその説明に用いられる。もう一つのこの領域への接近は、個人に焦点をおき、それへの社会の影響をみようとするものであり、これはもちろん個人心理学からの要求の線上にたつものである。この二つの方向は、接近のさいに何を中核概念とするかをめぐってさらにいくつかの立場が生じた。この状況を、当時たとえば **K. ヤング** (1925) は 4 つに整理している。²⁷⁾ すなわち、**E.A. ロス** や **C.A. エルウッド** における社会心の応用に立つ立場、**W. マクデュガル** に代表される本能論の立場、**J. デューイ**、**W. タマス** の習慣・態度を中核概念とする立場、**J. ボールドウィン**、**W. ジェームス** の自我論の流れをくむ **C.H. クーリー**、**G.H. ミード** の社会的自我の立場である。これに、すこしおくれた行動主義の **F.H. オルポート** の立場をつけくわえることができよう。学史をふりかえったとき、社会心の概念は結局それが「共通の個人意識」にほかならず、これをもっては個人間の相互作用を取扱えないが故に、また本能概念はその科学的根拠のあいまいさの故に説明概念としての立場を失なった。態度概念が現在まで社会心理学のもっとも中心的な概念としてとどまってきたのは、それが個人と社会を的確に媒介する機能にあると云える。その点で、社会的自我は社会・文化の内面化とその機能を理解するには有効性をもつが、社会・文化の客観的構造との対応の把握が脱落することに弱点があるといえよう。

彼の社会心理学は前述の如く、**H. スペンサー** の社会有機体説への批判から出発し、**M. ラツアールス**・**H. シュタインタール** および **W. ザント** の民族心理学をふまえ、また **F. ボアス** などの文化人類学に強く影響をうけている。個人と社会の相互関係の把握には明らかに **C. H. クーリー** の影響をみる。またその文化の理論における **W.G. サムナー** の示唆をみのがせない。ただしサムナーが文化を、その中に生きる人間に自動的な適応をせまり活動を不随意的に規制するものとみたのに対し、タマスは文化に対する個人の主体性をより強調し、独自に環境を規定するものとしてとらえている。心理学との関係についてみると、行動を個人の特徴や生理学的方向に還元して説明しようとするいづれの立場にも強く反撥した。また、一方で本能論を批判しながら

らもその影響からのがれられず、「四つの願望」に示される如く、人に普遍的に存在する社会的欲求を想定した。これをタマス自身は晩年には捨てたのであるが、社会学者にはその後も影響力をもちつづけた。これに代って **situational approach** を提起したわけであるが、これには行動主義の主張する条件発生的な考え方を、科学的説明の不可欠の条件として受容したものである。しかしタマスは、行動主義の、人間行動をすべて **S—R** 図式に還元する方向には強く反撥を示した。なによりもタマスは、人とその行動を一定の社会・文化的 **situation** へ適応する存在としてとらえる。この点で、同じシカゴ学派の **G. H. ミード** や **J. デューイ** の主張した機能主義心理学の立場に彼もまた立ったのである。晩年に **S. フロイト** から「昇華」や「無意識」の概念を受容し適応論を発展させている。

高く評価しなければならないのは、タマスが社会心理学の必然的な課題特質である人格と社会・文化の統合的把握を、マクロにもマイクロにもかたよらない視点と枠組でもって確立しようとしているところにある。この視点と枠組がタマスにおいて成功しているのは、少なくとも二つの点にあるといえよう。第一は、彼の理論の機能的中核概念をなす **attitude, value** および **situation** の設定であり、これによって人格と社会・文化との媒介を可能にしている。これらの機能的に関連しあう概念の提出は、当時社会行動の説明概念として提起されたさまざまな「社会力」の諸概念、たとえば **G. タルド** の〈模倣〉 **imitation**, **E. デイルケム** の〈拘束〉 **coustraint**, **L. グントロヴィッチ** の〈葛藤〉 **conflict**, **F. ギッジンクス** の〈同類意識〉 **consciousness of kind** などへの積極的な批判であったことに注目しなければならない。複雑な社会過程をこのような単一の概念だけでは説明できないとタマスは考えたのである。タマスが提出した概念のうちとりわけ **attitude** の概念がその後の社会心理学にとって不可欠なものとなったことは周知の事実である。そして多くの論者がその後 **attitude** のより詳細な分析や測定法を発展させてきた。ただその場合、社会・文化の分析がなされずそれとの対応を欠いたままに **attitude** の構造分析だけが論議されがちであり、また客観的な社会・文化とのダイナミックな対応を欠いたままに測定法が論じられる傾向がみられる。その点で、掘り下げ方は浅いにしろ、人格・社会・文化の同じ比重において人間生活を追求したタマスがいま一度評価されなければならない。

注目すべき第二の点は、タマスにおける諸概念および諸理論が単なる推論によって提出されたものではなく、未開文化、移民、非行、犯罪などの具体的なトピックの豊富な資料にもとづく実証研究による人間生活への密着から、必然性をもって提出され成熟してきたことである。これら社会調査による実証研究はその後のシカゴ学派の特

徴をなすフィールド・ワークに基礎を与えた。1920年代からの、たとえば R. パーク・W. バージェスにはじまるコミュニティ研究、F. M. スラッシャーの非行調査、H. W. ゴーボーのスラム研究などがそれである。その後の E. H. サザーランド²⁹⁾の犯罪学、H. ブロッチの非行研究とそれにもとづく人格・社会解体理論、D. リースマンの周知の社会的性格類型論などもまたその背景をタマスにもつ。

他方、タマスの弱点はその法則定位・一般化の扱い方にあるといわなければならない。タマスは当初、人間行動の法則の発見にきわめて楽観的であった。全くの帰納法的な方向で法則の発見が可能であると考えたのである。しかし中期以後、これを断念せざるをえなくなり、たとえば<典型的な発生方向>という考え方にもみられるように **attitude** 群によって構成される生活組織体の固定の仕方の類型化を試みている点では前進といえるが、しかしそれは形式の抽象類型にとどまり、個別事例と一般法則を真に媒介させる条件発生的理論類型を欠いている。このことは、『ポーランド農民』や『非適応少女』が結局事例と資料の単なる羅列に止まっているのをみるとき明らかである。そこには人間生活への密着による豊富な資料は示されてはいるが、それを正しく一般化して法則へ定位することができないでいる。しかし、一般化を急がずにまの資料を示すことの必要性を強調したことに、学史的にはタマスの貢献があったといえる。具体的な社会・文化の中に生きる人間の全体性の把握をともしれば等閑して、形式的に細分化した課題にのみかたよりがちな傾向にある現代の社会心理学をみるとき、タマスの提出した準拠枠はいま一度検討される価値をもつと考える。

註

- 1) 日本で社会学の立場からタマスを論じたものに次のものがある。
佐々木徹郎：「ウイリアム・タマスの社会学方法論」, 社会学研究：第4号（昭和26年），11～24頁。
同：「四つの願望理論について」, 社会学研究：第6号（昭和27年），16～24頁。
- 2) H. W. Odum, *American Sociology*. 1951；横越英一訳「アメリカ社会学」（法政出版局），212頁。
- 3) in, *Amer. J. Socio.* 1：434—445, 1896
- 4) in, *Amer. J. Socio.* 10：445—455, 1905
- 5) in, *Amer. J. Socio.* 19：624—639, 1914
- 6) in, *Suggestions of Modern Science Concerning Education*, by H. S. Jennings et al. pp 159—197. 1917
- 7) in, *The Unconsciousness：A Symposium*, by C. M. Child et al. pp 143—177.
- 8) in, *Personality and the Social Group*, ed. by E. W. Burgess. pp 1—15. 1929.

- 9) in, *Essays on Research in the Social Sciences*, by W.F.G. Swann et al. pp 175—194 1931.
- 10) in, *Amer. J. Sociol.* 42. 177—185, 1936.
- 11) in, *Amer. J. Sociol.* 10. 445—455, 1905.
- 12) W. I. Thomas, "The Scope and Method of Folk-Psychology", *Amer. J. Sociol.* I, 434—445, 1896.
- 13) W.I. Thomas, "Methodological Note" in, *Polish Peasant and Europe and America*, I, pp 1—86, (1918—20)
- 14) W. I. Thomas, *Source Book for Social Origins*, pp 13—26, 1909
- 15) W. I. Thomas, *The Province of Social Psychology in Amer. J. Sociol.* pp 446—449.
- 16) W. I. Thomas, *Polish Peasant in Europe and America*, I. p. 68
- 17) W.I. Thomas, "The Relation of Research to the Social Process" in, *Essays on Research in the Social Sciences*, ed. by W.F. Swann et al. pp 175—194, 1931.
- 18) *ibid.* pp 188—189.
- 19) W.I. Thomas, "Report to the Social Science Research Council on the Organization of a Program in the Field of Personality and Culture" pp 1—35, (1933) : reprinted in, *Social Behavior and Personality*, ed. by D.H. Volkart, pp 290—318. 1951.
- 20) W. I. Thomas, *Polish Peasant in Europe and America*, II, pp 1831—1907. (1918—20)
- 21) W. I. Thomas, *The Unadjusted Girl*, pp 1—40, 1925.
- 22) W. I. Thomas, *Polish Peasant in Europe and America*, II, pp 1831—1902. (1918—20)
- 23) W. I. Thomas, *Polish Peasant in Europe and America*, pp 1851—1857. (1918—20)
- 24) D. Riesman, *The Lonely Crowd*, 1950.
- 25) W.I. Thomas, "The Persistence of Primary-group Norm in Peasant Society" in Jennings et al., *Suggestion of Modern Science Concerning Education*, pp 167—187, 1917.
- 26) W. I. Thomas, *Polish Peasant in Europe and America*, pp 1467—1482 (1918—20)
- 27) K. Young, "Social Psychology" in, *The History and Prospects of the Social Science*, ed. by H.E. Barnes, 1925.
- 28) W. I. Thomas, *Source Book for Social Origins*, pp 13—26, 1909
- 29) F.B. Karpe, *American Social Psychology*, pp 379—380, 1932